高島屋史料館TOKYO企画展Vol.5「大阪万博 カレイドスコープ―アストロラマを覗く―」
セミナー1

1970年大阪万博から、2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）へ

橋爪 紳也（大阪府立大学研究推進機構特別教授／大阪府立大学観光産業戦略研究所長、本展監修者）

［日時］2020年2月9日（日）15:00～16:30
［会場］高島屋史料館TOKYO 5階旧貴賓室

万博研究の第一人者であり、大阪府・大阪市特別顧問として2025年の大阪・関西万博の誘致活動と誘致案立案に携わった橋爪紳也氏。これまで多くの関連著書や講演を通じて、万博を紹介しながら近代都市のメカニズムを解き明かしてこられました。前半はまず1970年大阪万博の様子について、実体験を交えて伺います。小学4年生の万博原体験です。後半は次の万博の誘致、構想について2020年段階での状況を伺っていきます。

橋爪 紳也（はしづめ・しんや）／大阪府立大学研究推進機構特別教授・観光産業戦略研究所長、本展監修者
1960年大阪府生まれ。1984年に京都大学工学部建築学科を卒業。同大学大学院工学研究科（建築学専攻）修士課程、大阪大学大学院工学研究科（環境工学専攻）博士課程修了。工学博士。京都精華大学人文学部助教授、大阪市立大学都市研究プラザ教授などを経て、現職。日本建築学会賞、日本都市計画学会石川賞など受賞。主な著書に、『モダン都市の誕生―大阪の街・東京の街』（吉川弘文館、2003年）、『EXPO'70パビリオン 大阪万博公式メモリアルガイド』（監修、平凡社、2010年）、『大阪万博の戦後史――EXPO'70から2025年万博へ』（創元社、2020年）、『万博と電気』（共編著、日本電気協会新聞部、2020年）などがある。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

今年（2020 年）は 1970 年大阪万博から 50 周年の節目です。日本の文化財保護法では、50 年経つと文化財に登録できるので、今年から「太陽の塔」も登録して欲しいですね。1990（平成 2）年に「未来の国宝は太陽の塔である」という文章を書いて以来、私はこの年を待っていました。今年うまく行けば太陽の塔や、1970 年万博の歴史が文化的・文化財的な再評価を受けられるのではないかと思っています。そういった背景もあり、今回は大阪万博に焦点を当てています。

百貨店と博覧会の関わり

日本で最初の博覧会と言えるものは何か？それには２つの説があります。一つは、東京の湯島聖堂で海外の万博に出品するものを集めて、事前にそれを見せる場として開催されたのが、日本で最初の博覧会であるという説です。

一方で、明治の初めに京都で行われた「京都博覧会」をもって、日本で最初の博覧会であった、というのが二つ目の説です。海外の博覧会を見た経験がある京都府知事が、東京に首都機能を移転したことで衰退した京都の勧業政策として博覧会を実施、以後、毎年継続して開催されることになりました。京都博覧会の成功を見て、名古屋や福岡といった各都市で博覧会（のちの共進会）が開催されるようになります。大阪でも、毎年、博覧会を実施する「博物場」という施設ができました。

博覧会と百貨店の関わりでいえば、ひとつには百貨店の原型が博覧会にあると言えます。内国勧業博覧会などに出品された商品を売り捌く施設として、東京に勧工場（大阪では勧商場と言いましたが）が創設され、のちに常設の施設として各所に開業します。博覧会や見本市の展示ブースと同様に、展示場内を小間に割って、さまざまな事業者が商品を販売する手法が採用されました。多種の商品を集めて売るこの勧工場の業態が、百貨店の原型になったということです。

一方で百貨店は博覧会の出展者でもありました。もともと百貨店の前身は呉服屋さんが多く、呉服店がそういう博覧会に出店をしていました。高島屋が最初に出店した国内の博覧会は、第 6 回京都博覧会になります。以降、毎年、高島屋は京都博覧会にさまざまな商品を出品しています。当時の博覧会は古今東西の品々、骨董品や伝統的な産品とともに、新しい商品が並べられました。また勧業振興の目的で始まった博覧会では、出展者や商品を評価、さまざまな賞を与えました。格付けを行い、産業振興につなげる意向がありました。

他にも京都の博覧会からはさまざまなものが生まれています。博覧会の時だけ外国人が神戸や大阪の居留地から京都に入って良いことになっていたので、外国人向けに新しい趣向を考えようと生まれたのが「都をどり」です。今ではさまざまな花街に、舞台で披露する踊りがありますが、もともと博覧会のための余興として発案されたものでした。当時、伊勢神宮の参拝が終わった後に通るお茶屋街がありました。芸妓･舞子のお茶屋の座敷踊りを､舞台に上げてそれを椅子に座って見るというものでした。

また、裏千家の家元が監修したそうですが、椅子に座ってお茶がいただけるというようなことも、外国人向けに始まりました。要は外国から人を招き入れることを意識することで、新しい文化や風習が生まれたわけです。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

高島屋にとってはそのような博覧会への出品と受賞が、博覧会との関わり合いの始まりでした。明治39年の「汽車博覧会」は、汽車の各車両に出店者が展示ブースを設けて、来場者が車両を行き来するというかたちで行われました。高島屋は1車両分出展しています。あるいは、船の上が展示場で、いろんな港で開催するという汽船の博覧会もありました。博覧会は物産展ですので、こういうかたちの博覧会というのはある種、理にかなっているんです。やがて、日英博覧会など海外の博覧会にも高島屋は出品するようになります。出品したものを日本に持ち帰り、海外の博覧会に出したということで箔をつけたわけです。

百貨店が博覧会で展示をする場合は、ある「場面」をつくります。当時は人形、今のマネキンに着せて、実際に人が着ているような展示を行っています。これは、今のウィンドウディスプレーと同じで、物語性のある場面をつくり、その中でさりげなく商品の宣伝をするのです。

大正になると、百貨店が博覧会の主催者側に参加します。たとえば、大阪で1925（大正14）年に行われた「大大阪記念博覧会」は、大阪毎日新聞主催で、これから大阪が大都市になることを高らかに謳う博覧会でした。大阪城の天守台に豊臣秀吉を主題とするパビリオンをつくって、それが後々の大阪城復興につながったことで有名な博覧会です。この時は大阪市内の各百貨店が協賛、会場ではなくそれぞれの実店舗に博覧会のサテライト会場を設けました。三越や大丸、そごうなどとともに、高島屋も大阪の主要な百貨店の実店舗の売り場に博覧会の展示ブースを置いて、それらの百貨店を巡ると博覧会の雰囲気が味わえるという趣向になっていました。

1. 絵葉書 汽車博覧会記念端書 髙島屋飯田呉服店 1906（明治39）年
2. 絵葉書 たかしまや飯田大阪呉服店 日英博覧会出品人形 1910（明治40）年
すべて［提供：橋爪紳也コレクション］

大正から昭和初期には、百貨店の中で博覧会が行われるようになります。明治頃は、博覧会に百貨店・呉服店が出店をするかたちでしたが、先程の大大阪記念博覧会あたりを節目として、百貨店の中で行われる催事に「〇〇博覧会」と名前をつけるようになります。たとえば大阪長堀橋の高島屋長堀店では、豊臣秀吉をテーマとした「豊太閤博覧会」というものが行われました。さまざまなシーンを見ながら、豊臣秀吉の一生が分かるという趣向ですね。なぜ秀吉の生涯が博覧会だと言われると、どうもよくわからないんですが（笑）。実際は、ありとあらゆる催事に「博覧会」と名前を付けていました。

あとは百貨店が、会場を企業に貸して、博覧会と称する催事を開催することも始まります。つまり百貨店が主催ではなくて、色んな企業がスポンサーとなって博覧会という催事を展開するようになります。たとえば日本橋高島屋で開催された「納涼婦人子供博覧会」は、ライオン歯磨が主催者でした。また同じライオン

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

歯磨主催の「戦捷日本コドモ博覧会」は、戦時下の博覧会でしたので、展示からも戦時色が伝わってきます。当時会場で配られたスタンプ台紙には、子供たちが兵隊の格好をしたイラストが添えられていて、時代の変化と共に博覧会のあり方が変わってきたことがわかります。

要は大量生産・大量消費を前提として、多くの商品が並び、陳列されていて、楽しく買い物ができる、そういう場所である百貨店と、博覧会のあり方には非常に親和性があります。博覧会の方が百貨店の原型であり、また百貨店が新たなかたちの博覧会と称する催事を生み出したといって良いでしょう。

1. 絵葉書 大阪・髙島屋の豊太閤博覧会「太閤様一代記」 1928（昭和 3）年
2. 絵葉書 戦捷日本コドモ博覧会 主催ライオン歯磨本舗 日本橋髙島屋の会場より 1938（昭和 13）年

すべて［提供：橋爪紳也コレクション］

1970 年大阪万博に出展した高島屋――みどり館

1970 年大阪万博にはさまざまな百貨店が関わりました。高島屋が出展者として

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

関与したものでは、「日本民芸館」と「みどり館」があります。

万博に向けて、大阪を拠点とする三和銀行は得意先である主要な企業、たとえば日立造船や大林組、学研などに声をかけて「みどり会」をつくります。高島屋も参画します。「みどり館」は、大林組の会長がプロデューサーで、建物は非常に画期的な構造をしています。地上で正三角形のフレームで五面のユニットを組み、そのユニットを持ち上げ施工する方法でした。工期が大きく短縮されます。

みどり館［提供：橋爪紳也コレクション］

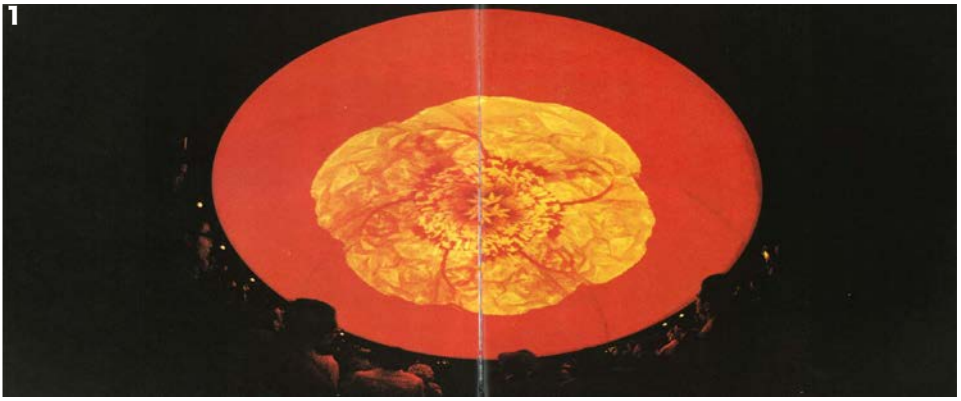
「みどり館」の展示では、前衛的な、世界初の全天全周映像をつくるというアイデアが先行して出されていました。それを実現させるべく、さまざまな試みがなされたと聞いています。今回の展覧会では、当時のみどり館関係者の方々から、非常に貴重な資料をお借りして展示しています。

全天全周映画は「アストロラマ」と命名されました。会場では人気パビリオンのひとつとして話題となり、多くの入場者を集めました。中に入ると全天全周映画が始まる前の待ち時間を過ごすホワイエになりますが、具体美術という当時の日本を代表する前衛的な現代美術作家のグループの作品を展示します。展示作品の一部は後に大林組が買い上げ、ある作品は今も大阪のル・ポンドシエルというレストランの 1 階に展示されています。

みどり館エントランスホールの具体美術展示。『1970 年 日本万国博覧会出典記録』（みどり会、1971 年）より
［所蔵：みどり館（慶應義塾大学アート・センター寄託）］

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

もっとも、誰も見たことがない全天全周映像を実現するために非常に苦労されたようです。五島光学が 5 台のカメラを合体させたオリジナルの撮影機を開発しました。5 台のカメラで撮影した映像をそれぞれ先の尖ったかたちに切り出して、5 台のプロジェクター映すと、全天全周になるだろうという考えです。今考えても、上の方でずれそうだな、ということが予想されますね。今だと境界をうまくつなぐデジタル技術がありますが、当時はあくまでも投影として工夫しました。今回このフィルムを展示していますが、劣化して色が赤くなってきているので、何とかデジタル上で当時のカラーに戻したいと考えています。

1


2

3

1. 全天全周映画「アストロラマ」。『1970 年 日本万国博覧会出典記録』（みどり会、1971 年）より［所蔵：みどり館（慶應義塾大学アート・センター寄託）］
2. 映像「アストロラマ」のために制作された映画『誕生』［所蔵：慶應義塾大学アート・センター］
3. 映画「アストロラマ」（仮題）「誕生」台本　学研制作［所蔵：みどり館（慶應義塾大学アート・センター寄託）］

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

高島屋は、みどり館や日本民芸館だけではなく、エクスポクラブという名前の飲料店の出展や、IBMやアメリカングループ館、イラン館等々の内装、あとは迎賓館のインテリアにも携わっていました。他のパビリオンのユニフォームにも高島屋が制作しているものがありました。たとえばガスパビリオン。日本中のガス会社が共同で出したパビリオンです。ここは「笑い」がテーマで、笑っている顔を胸元に描いたそうです。高島屋は博覧会で催事にも関与していて、ピエールカルダンのファッションショーを会場内の水上ステージで開催しました。

ガスパビリオンレプリカ制服
［所蔵：万博記念公園マネジメント・パートナーズ］

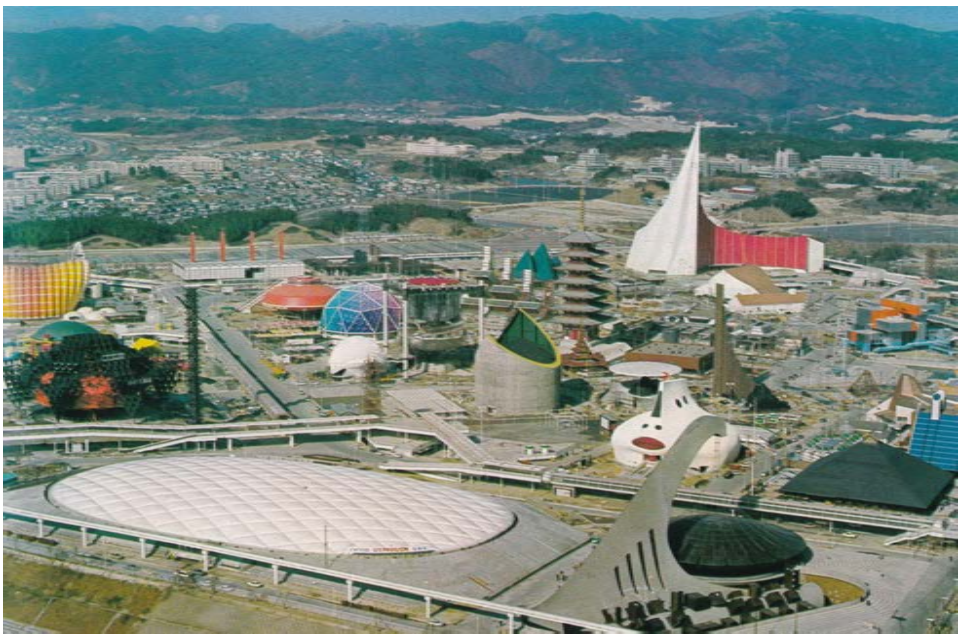
橋爪紳也が見た1970年大阪万博

1970年万博の時、私は小学4年生でした。うちは大阪で建築塗装業を営んでいました。職人10人ほど住み込みで、通いが30～40人いる職人の倅として育ちました。博覧会の時は、会場に18回ほど行っています。全パビリオンにとりあえず入って、パンフレットをもらい、バッジを集め、スタンプを押し、当時はホステスという呼称で呼ばれていた各国のアテンダントのお姉さんを見てはサインをもらうことが当時の小学生の流行でした。その時本当に生まれて初めて外国の人と対面しました。各国のパビリオンで見たこともないいろんな文化に触れて、世界はこんなに多様なのかと感じました。異文化に触れた最初の経験です。

なぜ18回も行ったかというと、毎週のように我が家にいろんな親戚が泊まりに来て、親戚と一緒に日曜日に博覧会場に行っていたんです。加えて会社をやっていたので、得意先の家族が東京から来て、大阪で宿が取れないからと我が家に泊まり、一緒に博覧会場に行くと。そのうち夏頃になると徐々に親戚の得意先とか、得意先の親戚とかもやってきます（笑）。完全な他人が、つてを辿って大阪の知り合いの家に泊まって博覧会に行く、という日々が半年間続いていました。本当に楽しい、非日常の半年だったなと、子ども心に感じた思いを、強く覚えております。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

当時 1970 年はちょうど安保闘争の年で、東西冷戦下で行われた博覧会でした。ソ連館は会場内で最も高いタワー。対するアメリカ館は、会場の中で日本館を除くと最も広い建物でした。ソ連とアメリカに一番高い建物と広い敷地をそれぞれ用意し、なおかつ最も離れた場所に配置するという配慮がありました。



1970 年当時の万博会場空撮。右奥に見える背の高い建物がソ連館、左手前にある平たく広い建物がアメリカ館［提供：橋爪紳也コレクション］

ソ連館は非常に綺麗なタワーです。レーニン生誕 100 年の展示がメインでしたが、多くの方は宇宙開発のソユーズなど、ロケットの展示があったことを覚えておられると思います。アメリカ館は、日本で初めての空気幕構造。大きなテントを張り中の気圧を少しだけ高くして大空間を支えるもの。テントメーカーの太陽工業が世界的に飛躍するきっかけになりました。目玉の展示は月の石。入館するために 3 時間ぐらい並んだと思われますが、実は日本館にも小さい月の石があったので、そっちのほうが早く見られたという裏話もあります。もう一つの裏話は、博覧会の後、各パビリオンが売りに出された際、アメリカ館が 1 ドル程度で出たそうなんです。解体費を抑えようとしたんですね。ただ、買った人は莫大な年間維持費用を出さなければならず、結局誰も買わなかったそうですが。博覧会後には、博覧会の記憶をいろんな人達が持ち帰りたいと、パビリオンだけでなく展示品も売りに出たそうです。

各国を代表する建築家や、若手有望な建築家がパビリオンの設計をやっている事例もありました。たとえばセイロン（現在のスリランカ）館は、ジェフリー・バワ（1919-2003）というスリランカを代表する建築家がパビリオンを設計していました。中華民国館は I.M. ペイ（1917-2019）という中国系の世界的な巨匠の設計。私は 10 歳で子供でしたので、世界の文化に触れると同時に各企業館が非常に楽しく、貴重な体験をしました。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

カナダ館。外壁を一面の鏡で覆うというデザインで工事中から注目を集めた展示館の 1 つだった
［提供：橋爪紳也コレクション］

1970 年万博当時、関係者の多くが 1967 年のカナダ・モントリオール万博を見て、そこでの展示空間のあり方を大阪でも展開したそうです。博覧会は商品、あるいは最新の発明を並べて見る場所だという認識でしたが、モントリオール万博ぐらいから、巨大映像やさまざまな演出によるマルチ映像、マルチスクリーン、あるいは観客席が動くとか、そういうさまざまな演出による展示空間をつくることによって、情報を伝える場所に変わりました。商品や技術そのものではなく、情報を見せる場所に変わったわけです。

大阪万博は転換期において開催されました。モントリオール万博で行われたようなユニークな映像の手法などが、さらに発展・展開されました。モントリオール万博の他にも、ウォールト・ディズニーが主要なパビリオンを設計・演出した 1964 年のニューヨーク世界博覧会があります。有名なのはイッツ・ア・スモールワールドという大人形館。世界中の民族衣装に身をまとった人形が音楽に合わせて手をふるジオラマの間を船でずっと巡っていくものです。博覧会が終わった後にそれが移築され、ディズニーランドの人気アトラクションになりました。テーマパークは博覧会から派生したといって良いかもしれません。

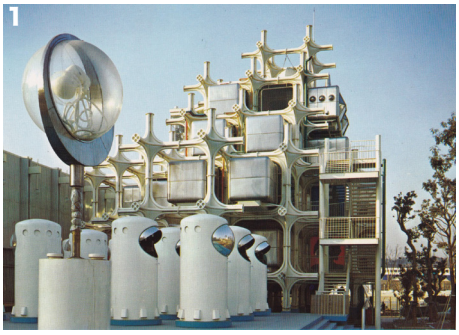
当時、万博ではいろんな仕組みが試用されていました。駐車場や入場カウンターにセンサーがあって、会場内の人数や、車の混み具合が中央で把握できるという仕組みができました。これは日本で初めての、情報の中央制御の例です。あとは、地域冷房。大きなユニットを設けて、複数の建物すべての冷暖房を駆動できるというものです。動く歩道という、空中デッキの横を流れるベルトコンベヤーで人を移動させるインフラが何キロかありましたが、すべて屋根がついていました。その冷房もすべて、個別の冷房ではなくてある大きな機械で冷気をつくる。当時としては画期的な試みでした。

この万博で行われたもう一つの大きな試みは、プロデューサーという概念を採用したことです。従来こういう展示演出にプロデューサーの概念はなかったのですが、三菱グループが共同出展する時に、世界の博覧会にはプロデューサーというのがあるらしいが、プロデューサーというのは日本ではどんな役割なんだという話になったそうです。日本でプロデューサーシステムを入れている業態は映画制作だということで、三菱は博覧会の展示出展のプロデザインを、東宝の田中

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

友幸（1910-1997）という映画プロデューサーに依頼しています。田中友幸さんはゴジラなどの怪獣映画・特撮映画をされている人なので、ここでは円谷英二（1901-1970）さんに協力依頼をされまして、火山の中の様子を動く歩道から見える巨大なスクリーンに映すというドキドキする魅力的な演出を、東宝特撮映画・円谷プロの特殊撮影技術を駆使して見せました。三菱未来館には、この巨大映像以外にも、映像を煙に投影したり、人間が踊る姿のシルエットを巨大画面に映す演出もありました。忘れもしないのは、日本の南海上に現れた巨大台風に向かって飛行機が飛び立ち、台風の真ん中の目のところに薬を散布すると一瞬にして青空になる、という素晴らしい映像。子供心にこれはもう 5 年後ぐらいできるのだと思い込んでおりましたが、いまだに全くそんなものはできていませんね（笑）。

建築の話をしましょう。当時はメタボリズム建築が流行っていて、それを唱える建築家が数多く参加していました。メタボリズムは新陳代謝という意味合いですが、ユニットやカプセルを工場でつくって運んできて、建設現場で敷設すると短期間で建物ができるという、建築の工業化を実際に具体化したものです。菊竹清訓（1928-2011）のエキスポタワーは、当初 400m 級のシンボルタワーを構想しておりましたが、諸般の事情でできず、結局 140m くらいのタワーになりました。電波中継塔を兼ねていて、これを数多く立てていくと空中都市ができるという未来都市のモデルを示しています。空中に浮かんでいるということに関連して言うと、大谷幸夫（1924-2013）さんが設計した住友童話館は非常に人気がありましたね。タカラビューティリオンは、タカラベルモントという大阪の美容機器等の会社が出したパビリオンで、黒川紀章（1934-2007）の設計です。工場で全部つくって、現場は一週間で組み上げたというのが、当時話題になりました。軸組の柱梁やカプセルを幾らでも増殖させることができ、時代遅れになったら新しいカプセルと入れ替えれば、未来永劫建築は新陳代謝し続けるという理想をかたちにしたものです。こういうユニット化・カプセル化のモデルが、1970 年万博ではいくつも示されました。余談ですが、大阪梅田のサウナの社長が博覧会場に行った際、カプセル型の建築を見て「これや！」と思ったそうで、博覧会のあと数年後にカプセルホテルなるものが世界で初めて大阪にオープンします。カプセルホテルも 1970 年万博から始まったもののひとつです。他にも三洋館が出した通称・人間洗濯機（ウルトラソニックバス）など、当時は建築に限らず、各社がいろんなカプセル化・ユニット化されたもののアイディアを出していました。



1. 黒川紀章設計のタカラビューティリオン
2. 三洋館が出したウルトラソニックバス。通称「人間洗濯機」と呼ばれた
すべて［提供：橋爪紳也コレクション］

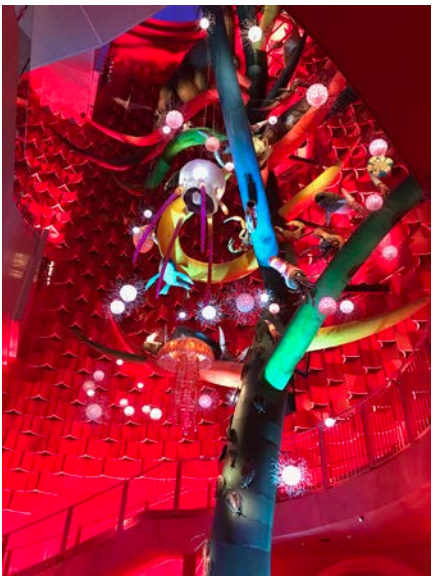
通信的な面でも万博は非常に画期的でした。先ほども少し触れましたが、警備会

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

社も会場内の情報を一元化した先進的な情報管理が行われていたことがわかります。テレビ電話も実用化されていました。迷子になると、はぐれたお父さんお母さんとテレビ電話で会うことができるというので、私は父親に「お前わざと迷子になれ。そうすればテレビ電話に写ることができる」と言われて、そんなことをした記憶があります(笑)。私の父親は職人なので普段は無口だったんですけども、博覧会場に一緒に行った時に、「あのパビリオンはうちの職人が塗ったんや」ということを言っていましたね。当時は本当に多くの人が博覧会に関わり、仕事をしたことが誇りになっていました。私はこれで人生観が変わって、こういう多くの人が集まる場所がとても大事だと思い、この小学四年生の時は、家に帰ると自分でパビリオンの絵を描いて、自分がパビリオンをつくるならこんなのだ！と、架空のパビリオンを幾つもつくって並べて遊んでいたようです。

現在に残る大阪万博の痕跡

その後、今では実際に博覧会の仕事をさせていただいていて、大阪の千里の博覧会跡地の構想にはトータル 30 年ぐらい、色んな段階で入らせていただきました。太陽の塔もようやくリニューアルし、耐震補強が終わりました。もともとこれは半年経ったら壊す予定で、強度がないハリボテの建物でした。この外観そのままに、内側にもうひとつ鉄筋コンクリートの層をつくって、外からは見えませんが内側にもう 1 個タワーをつくったようなかたちで耐震補強を行いました。一昨年から、一般公開されています。内部の展示品は傷んでいたので、現代芸術研究所に参加していただき修繕しました。万博開催当時はかなり暗い、ダークな赤色の空間だった記憶がありますが、今は最新の LED で明るい印象です。



耐震補強工事が完了した太陽の塔。内部も一般公開されている［提供：橋爪紳也コレクション］

もうひとつ、現地には「鉄鋼館」というパビリオンが残っていて、そこに 1970 年万博の時に各国が日本に寄贈した展示品を、保存しながら展示するというメモリアルミュージアム「EXPO’70 パビリオン」をつくりました。これも計画当

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

初から関わらせていただいて、2010 年にオープンしました。鉄鋼館は前川國男（1905-1986）の設計で、最初から恒久施設のホールとしてつくられた建築です。たとえばホール部分は作曲家の武満徹（1930-1996）さんがプロデューサーをされた部分です。空中に 140 を超えるスピーカーが吊ってあって、それぞれから音が鳴るという空間を、今から思うと当時では非常に複雑な仕組みの電子的なプログラミングで演出されていました。日本における電子音楽の歴史のなかで大事な試みであったそうです。

前川國男設計の「鉄鋼館（現在は「EXPO'70 パビリオン」として公開中）」。世界でも最新、最高の技術が結集された音楽ホールは、天井、壁、床下に配されたものも含めると 1008 個のスピーカーが使用されている
［提供：橋爪紳也コレクション］

「EXPO'70 パビリオン」に行くと、博覧会が打ち立てたさまざまな数字が記載してあります。入場者数 6,421 万 8,770 人。これは後に上海世界博覧会がベンチマークとした数字で、いかにこれを抜くのかというのが大事な目標になっておりました。あと、迷い子 4 万 8139 人。このうちの 1 人か 2 人は私のはずです（笑）。あと尋ね人 12 万 5778 人。これは日本中から団体が来られて、会場内で行方不明になる大人が山のようにいたと。子どもが 4 万人しか迷っていないのに、大人が 12 万人行方不明になるというのはどういうことなんだと思いますが（笑）。あと、出産 1 人、結婚 55 組。当時 1970 年生まれの子どもは、男の子は「博」、女の子は「博子」という、博覧会にちなむ名前を付けた人が多かったそうです。

こういう博覧会の経験のあと、その後の私は万博の仕事をするということになったわけです。最近の博覧会に関わる仕事としては、2008 年スペイン・サラゴサ万博の日本政府出展、2010 年上海世博大阪市パビリオンのプロデュース、今年 10 月のドバイ万博日本館基本構想に関わらせていただきました。

EXPO'70 パビリオン内の展示の一部。1970 年大阪万博に関するさまざまな記録・数字が壁一面に書かれている
［提供：橋爪紳也コレクション］

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

2025年万博の誘致

2025年、大阪で開催される万博は、東京ではそれほど話題に上がっていないようですが、誘致に関わった経験をお話ししたいと思います。オリンピックは都市が主催しますが、万国博覧会は国家が主催者です。ですから他の国と共に競合して、全世界の博覧会の上役を常任している国々の投票の下に、開催国としての権利を勝ち取る必要がありました。当初フランスがライバルでしたが、途中からロシアとアゼルバイジャンも参入しました。

私は2025年に大阪万博を行うため、どのように検討を進めたらいいのかを検討するという最初期の任務を受けることになりました。要は、万国博覧会は国が主催なので、国家として閣議了解を得てから立候補するものなんです。つまり政府が動き始める前に、まずは大阪府で案をつくる必要があり、そのためにはどのような検討会がいるのか、ということを検討する必要がある。

加えて大阪府の検討会も2段階あります。2015年から始まった、大阪府の実質的な検討会は私が座長で立ち上げました。その時点では大まかなシナリオがありました。万博の開催国を決めるにあたって、ある国がある年度に開催を希望したら、同じ年度に開催国として立候補したい国は半年内に手を挙げなければいけない、というルールがあるんです。検討会が始まった時点でパリが準備しているという情報があり、フランスが手を挙げたら半年内に手を挙げないとエントリーできない。大体それが2017~2018年に決まるであろうことを踏まえ、2018年の投票に諸々の準備を間に合わせる必要がある。つまり、フランスがいつ手を上げるかわからないなかで、できるだけ急がなければエントリーに間に合わないということが見えておりました。

その後、政府の検討会にも入り、政府案、中でも会場計画の際には中心的な役割をさせていただきました。2020年の夏くらいまでにプロデューサーが決まり、年内には基本構想がまとまる予定です。

なぜ再び大阪万博をやるのか？構想と意義

最初に私や府知事が構想案を出した時は、どこに説明に行っても大反対を受けました。政治家、経済界の方々に話しても、「なんで今ごろ万博をやるんだ。あれは経済成長をしている証として、高度経済成長をしている国々がやるべきものであって、今の日本がもう一度1970年と同じように万博をする意味が分からない」と。税金の無駄遣いだ、というようなことも言われまして。

その際にお伝えしたのは、万国博覧会の開催意義は、20世紀と21世紀で全く違うものに変わっているということです。これは実際に国際条約のルールが変わっていて、今の博覧会は「直面している課題を、世界各国・世界人類が解決する場」という風に規定されています。20世紀末に、条約批准各国間でそういった変更がなされました。昔の万博は、経済成長した国が自国の技術や産業を示す場でありましたが、今の博覧会はできるだけ多くの国や企業が関与して、人類共通の課題を解決しましょう、そのために、新たな技術や新しい産業の振興を目指

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

しましょう、という考え方に変わりました。ですので、21 世紀の博覧会のテーマは非常に独特な、ある課題に特化しています。愛地球博は環境、スペイン・サラゴサ万博は水の問題、上海は都市問題、韓国の麗水万博は海洋支援と海の汚染問題、ミラノ博は人口が爆発している現在の地球ではファストフードではなくスローフードが大事だと、イタリア発の食料をテーマとしていて、中央アジアで初めて開催されたカザフスタンのアスタナ国際博覧会は、エネルギー大国でもあるカザフスタンで未来のエネルギーについて考えようという博覧会。今年のドバイ博覧会は、コミュニケーションの博覧会というテーマを掲げています。

2025 年の万博は、当初の大阪府案では「人類の健康・長寿への挑戦」というテーマを上げていました。しかし政府から「これでは世界の国々に共鳴してもらえない」という指摘がありました。最終的に落ち着いたのは「いのち輝く未来社会のデザイン」。英語の方が意味は取りやすく「Designing Future Society for Our Lives」、「私たちが生きるための未来社会づくり」です。サブテーマは「三つの命」。「Saving Lives（命を救う）」、「Empowering Lives（命を励ます）」、「Connecting Lives（命をつなぐ）」。「救う」「力を与える」「つなぐ」という、三本柱のなかで、命と人生について考えていきましょうという想いが込められています。

少子高齢化でこれから「人生 100 年の時代」ということだけではなくて、お子さん達の健やかな成長もきっちり考えるんだというテーマです。「一人一人のいのちが輝く生き方と、それを可能にする社会・経済の未来像を参加者全員で共創する」というのが、誘致案で示した大事なメッセージでした。共創する、世界の人と共につくることが重要であるという点も強調しました。あるプレゼンテーションでは、日本の塗料会社が伝染病を媒介する蚊が壁に飛びつきにくいペンキを発明し、アフリカで現地生産している例を挙げ、こういうことが我々の目指す社会の一つの事例である、という説明をしました。ある地域の課題に対して、他国の技術やアイデアがその解決策を示し、それがその地域だけではなく同様の世界の問題を解決してゆく。そういうことが大事だというプレゼンテーションを行いました。

もう一つのコンセプトとして「PEOPLE'S LIVING LAB」という概念があります。万博開催期間には会場は毎日 20 万人が来るテストフィールドになるので、会場すべてが実験場と言え、そこで新しい技術をテストして今後実用化していこう、あるいは、博覧会までに大阪でさまざまな実験をしたものを、博覧会場で成果として見せようというコンセプトです。未来の新しい社会「SOCIETY 5.0」や人工知能とか、あるいは自動運転、IOT や AI を駆使した新しい社会を示したいと考えています。もう一つは SDGs、持続可能な開発です。国連が提唱している、世界が多くの課題を持ちながら持続的に発展するような目標のゴールが 2030 年で、そこに向けて大阪の博覧会は貢献すると強調しました。

プレゼン時にはなぜ大阪でもう一回万博をやるのかを 4 つ理由をあげて説明をしていました。一つは、「未来社会で鍵となる科学・技術力、利他精神、アニメ等の文化」が大阪・関西にはある。あとは「アクセス等の利便性や治安が世界最高レベル」であり、「多様な価値に対して寛容である」ということ。最後は「自然災害を乗り越え、自然と共生した持続可能な社会を提示」。これは神戸の地震もあるのですが、東北の地震があって、海外からすると日本は災害に対して多くの問題があるのではなかろうかと思われるんだけど、だからこそ我々は災害を乗り越え、自然と共に持続可能な社会を示すことができるんだ、と主張しました。

なかでも大阪がユニークなのは、「利他の精神」を強く打ち出しているところ

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

だと思います。大阪商人の間には「三方よし」という言葉があります。「売り手よし」、「買い手よし」、「世間よし」。単なる暴利を貪るような商売を大阪はしません、ということが昔から言われていて、これは遡ると近江商人、滋賀県から大阪に来た商人の家訓でありました。この考え方が大阪には根付いているのです。日本が過去の博覧会を成功させてきたことも強みとして打ち出しました。加えて「大阪」ではなく、あくまでも「関西」の博覧会だということも強調しました。「関西エリア」を一体でアピールしました。

万博の後に何を残すのか？

博覧会の後に何を残すのか。今わが国は少子高齢化で生産人口が減っていると言われていますが、間もなく世界中が同じフェーズに入ります。中国はすでに2020年代で人口が減少し、日本よりも早く高齢化社会へ進んでいく。インドやインドネシア、ベトナムなど、しばらくはまだ人口が増えていく若い国もありますが、2060年代になると世界中のすべての国が少子高齢化の段階に入り、2100年ぐらいには世界人口100～110億人くらいで安定するそうです。日本は現在人口減少で衰えていくと思われていますが、実は世界的な現象です。しかし課題解決をすれば、もう一度先に進むことができる分野が多々あるという認識のもとに、博覧会を考えなくてはいけない。そのなかで、「いのち輝く」という、すべての人が元気で人生を充足できる社会のあり方を示すということが、一つ大事なことであろうと考えています。

松井市長は大阪府知事のころ、「会場に行くと10歳若返る博覧会を考えてくれ」とおっしゃっていました。つまり、訪れた人の誰もが元気になるような博覧会にする。関西はIPS細胞をはじめとしたライフサイエンスが盛んですのでそういう要素や、あとはロボットなどのサポートによって、実際の身体は衰えていても10歳若返って元気に働けたり元気に遊んだりできるような、そんなことを考えられる博覧会になればなあと。加えて、SDGsの今の目標が2030年に達成されることと想定されているので、2025年から「SDGs+ビヨンド」として、2030年以降のことを考え始める機会にしようということを言っています。

博覧会は、何よりも若い人たちがそこで頑張れる場所であるはずです。1970年万博の時、岡本太郎先生は50代、丹下先生も50代、磯崎先生は20代後半～30代くらいです。クリエイターの方々は30～40代が活躍していました。当時の建築界で言うと、村野藤吾先生や東畑謙三先生が若い人たちに活躍の場を用意するような役割を担われた。是非今度の博覧会は、次世代の日本を背負う20～40代のクリエイターが活躍できるような博覧会にしたい。従来の博覧会を越えて、上の世代には思いつかないようなアイディアが出たり、新しい流行が生まれたり、そこから素晴らしい人が育つような、そんな万博にしたいと思っています。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

最新の 2025 日本国際博覧会、会場イメージパース［提供：2025 年日本国際博覧会協会］

会場配置計画（2021 年 8 月時点）［提供：2025 年日本国際博覧会協会］

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.